勝負の世界

西南大学助教授　松井安信

綱力講座（9）

勝負の世界は厳しいと思う。今場所くびすをせつして吉葉山、鏡里という、両横綱が土俵から姿を消していつた。いれ代つて若乃花の横綱昇格が決つたようだ。明暗の対照がクッキリ浮ぶ。両横綱の年令はまだ三十七、八すらしいが引退声明によると、肉体の限界が理由とか。あまり年令的に違わないぼくは、思わず首をなでたことであつた。勝負の世界といえば、先日ある週間紙に取材されていた巨人の藤本投手と南村選手の引退と解雇をめぐる記事も、この世界の厳しさを切々と伝えていた。将棋では野武士のような升田九段が昨年王将戦、最高位戦、名人戦に勝ちまくつて、万人未踏のトリプル・クラウンをかちとつたが、その陰から威様然とした大山名人の顔が浮ぶ。このように勝利の栄誉は、やがて後に続く者たちにバトンが渡されてゆく。年々歳々花同じ、年々歳々人同じからず、といつた感がふつと胸をかすめてゆくしかしそれも一瞬の間。考えてみれば、このような人たちは、非凡の才をもち合せたかケタ外れの忍耐や努力心に恵まれて、華々しい世界にデヴューし、万人のファンの声援を背後にうけながら、そのもつている全力量、文字通り身も心も燃やしきつて、対等な条件で闘い、そして勝ち、また負けるのである。俺丈夫の本懐、まさにこれにすぐるものはないであろう。だからこそ一敗地にまみれた人も闘つて悔なく、いさぎよく散つてゆくのである。咲く花は美しく、また散ることによつてその美しさはます。といつてもそこは人間社会のこと、すべてをたんなる自然現象的に割りきることができないいろいろの人間関係が迫つてくることであろう。だがその奥にはなにかしら花にもたとえてみたくなるような自然現象のリズムが奏でられているように思う。

それに比べると、ぼくたちの住む社会の現象はどうであろうか。平凡な人間が、平凡な生活で満足しようとするのに、それすら汲々としている。まだそれもよい方でその生活を辛うじて支えている。職すら奪われて、一家が路頭に迷う姿を、苦もなくぼくらの周辺でみることができる、というのは一体どういうことなのか。新聞では過剰生産とか、操業短縮とかいう記事と一緒に、その三面記事には一家心中等の記事が載せられている。イギリスのある有名な学者はこれらの矛盾した現象を「豊富の中の貧困」とか「非自然的失業」とかいつている。

ところで、ぼくたちはこれらの現象や階級闘争や戦争等を、さきの勝負の世界と同じように、一種の自然現象として片づけてよいものであろうか。断じてならない。

ちよつと身近の、それも暗い話で恐縮だが、つい数日前のこと、ぼくは親しくしている娘さんの弟が、花も待たずに散つていつた報せをうけた。つい先だつて就職口がみつかつたと喜色満面報せにきた姉さんから、この悲報を聞こうとは。そして今日はその葬儀の日であつた。娘さんが涙して語つたたどたどしい話は要するに、永い失職のうちに、働く自信とか意欲を失つたものらしい、とのこと。ぼくは聞くうちに、電光石火のように、ルンペン・プロレタリアートという文字が、頭のテツペンから爪先までビリビリとかけめぐるのを覚えた。弟さんは勝負師のような華やかな生活を夢みたのではない。ただ平凡に、人間らしく生きてゆくことを願んでいたのだ。読者の中には気が弱すぎる、と批判する人もあろう。ぼくもそう思い、そう娘さんにいつたし、そんな声は親戚の会話からも洩れていたようだ。しかしルンペン・プロとはレッキとした経済用語であり労働者大衆を受けいれる準備を整えている。ぼくらは誰がこの人をそうさせたか、とくと考えてみる必要があろう。「非自然的失業」とこの弟さんの死。

では幸い就職している労働者の場合はどうであろうか。それは読者の毎日の生活が実感をもつて教えていることだし、研究会でも勉強されていることだろうから、ここでは触れないでおこう。ただ一言さきの勝負の世界と比較して、労資の間には対等の条件がない。資本を「持てる者」と「持たざる者」という前提そのものの不平等から資本主義社会は出発している労働者が唯一の持物である労働力を売つて得た労賃は、平凡に人らしく生きてゆくために「必要」なものである。だのに労働力の売手は多く、買手は少いときいている。これでは対等の条件など期待する方が無理という話。そこがつけめとばかり、「持てる」階級は、ありとあらゆる手段を総動員して、最大の利潤をあげようとする。労働者は弱い立場を団結して組織の力ではねかえそうとする。階級闘争はこのようにして起る。負ければルンペン・プロが待ち構えている。これがぼくらの勝負の世界である。さてどちらの世界が厳しいであろうか、と聞くのはやぼかも知れないが。

中小館ッブス映画会社

悪法が三鉱映画に魔手

割引中止、値上げは必ず来る

二月に上映する映画をとりきめるため、組合、会社双方から一月十日福岡の映画配給支社へ出向いたところ、各配給支社から一斉に「二月の映画フィルムは貸せません」「二月に映画フィルムは買いていません」と申し合せたように断りの言葉が浴びせられた。「何故貸せないか」ということで質問を発したところ、「三鉱の映画が街の映画館を圧迫し、入場成績が悪い」ということから貸せないとの返事に、組合としてもその真相を約一カ月にわたり調査したところ、政府や独占資本の魔手がわれわれの上に伸びて来ているのがわかつた。

大衆に不況のシワ寄せ

昨年の暮を押しせまつた十二月十九日、都興組（東京都興行環境衛生同業組合）は月間五十万人と推定される東京映愛連（東京映画愛好連合会）に対し一方的に一月一日以降、会員証割引を停止すると通知して、これが大阪、愛知、福岡、岡山と主要都市で問題になつている。

ではなぜ都興組や興行組合がこのようなことをやつたのだろうか、彼等があげる一つの理由は「不況」ということがある。

この不況打開のため入場税軽減、プリント代適正化（映画会社から貸すフィルム代）ということが考えられるが、プリントを配給する六社も興行を行い、興行組合の理事などに多数名を連ねており、しかも座館の系統化が強化されている今日では、正面から云い出せず次第に大資本の映画会社に身売りをしているというのが実態である入場税、プリント代で不況打開が出来ず、映画大資本家にいためつけられて来た中小の映画館主がとる方法は残つた割引停止ということで映画を観る人に不況のシワ寄せをしてきたことになる。

三鉱映画を三十円に

こんどの三鉱映画を規制するような態度に出て来ているのは、全く東京その他の映画割引中止と、その性格は同じで、環境衛生法という悪法に便乗した独占資本家たちが労働者に挑戦して来たものである。

映画配給各支社は三鉱の現行映画を三十円に値上げしなければ貸せないといつている。これは三鉱の映画を中止せよということに通ずる。三十円も出すならば環境もフィルムもよく二本立で四十円、五十円で見られる常設館に行くという声がある。その中常設館側は東京やその他が行つている割引の中止を申し入れてくる。次は映画観覧料の値上げとなつてくるのは必至である。

独占資本の集中

この一連の動きの黒幕は、ということになるが、総評やその他からの情報によると

この騒動の張本人は都興組になつているが、その黒幕は大映ではないかということである。大映は他の五社と違つて直系館をあまりもつていないので興行成績が悪い。そこでアセつた永田社長は、環境衛生法をタテに中小座館主を金融面でしばりあげ系列化させようとしたのではないか。

という見方がある。

三鉱映画の歴史

三鉱の映画は戦時中、福利施設の一環として、月一・二回本店から映画のプリントが配給され、各所を無料で巡回していたが、戦後労働組合が結成されてからは、週一回宛各鉱所で免税価格（四円九十九銭）で上映していたが、昭和二十六年の暮から、二十七年にかけて興行組合から免税価格では常設館がたつていかないという申入れに、二十七年下期より十円に値上げ、現行に至つたものである。

環境衛生法の目的

物価値上げ案として、労働大衆が反対した悪法、環境衛生法（環境衛生関係営業運営の適正化に関する法律）の目的は次の通りで、独占資本、大資本に奉仕するものである。

× × ×

この法律は、公衆衛生の見地から国民の日常生活にきわめて深い関係のある環境衛生関係の営業について、衛生措置の基準を遵守させ、および衛生施設の改善向上を図るため、これらの営業者の組織の自主的活動を促進するとともに、当該営業における過度の競争により適正な衛生措置を講ずることが阻害され、又は阻害されるおそれがある場合に、料金等の規制その他経営の安定をもたらすための措置を講ずることができるようにし、もつて公衆衛生の向上及び増進に資することを目的とする。

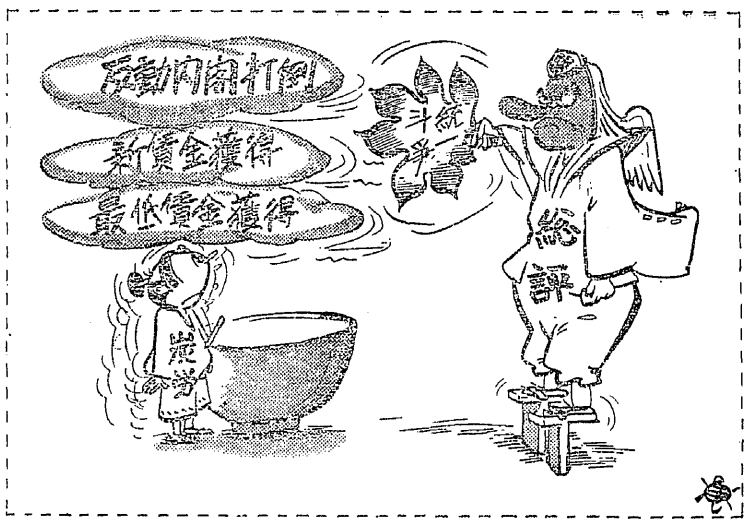
この間、大映の一番線（大牟田第一封切）を組合管理で約半年間上映したこともある。

強腰の配給支社

大牟田では、三鉱労組が中心に、興行組合と話をすすめている。この中で組合としては、映画配給支社のいう三十円には納得できない。経営の苦しい中小館主は映画会社へプリント代の値下げ、政府に入場税の引下げをやるよう協力し、よい映画を安く、多くの人に観てもらうための努力をともにする方針をたてている。

幸いに大牟田の興行組合は、紛争が起らないよう配給支社にフィルム配給を行うよう強硬の態度に出て来ている。二月分は暫定としてフィルムの配給は受け映写することになつているが、三月以降は配給支社が強硬態度に出ることも予想され、組合としても根本的な方針をたてる時期に来ている。

われわれは環境衛生法の制定と同時に風呂代があがつたことを思うと、映画の入場料も決してあがらぬとはいえない。



身體障害児に福音

県が無料療育相談開く

身体障害児療育指導相談が福岡県主催で次の要領で実施される。

○相談は無料で九大の専門医や県、市の指導員が多数担当され、身体障害児をもたれる肉親の深刻な悩みをいくらかでも解消出来ることが趣旨で開かれるので遠慮なく相談に応ずるよう、市の保健所や社会課ではよびかけている。

○指導要領

㋑ 専門医師（整形外科）による身体障害児の無料療育指導

㋺ 育成医療対象者の把握および諸手続きの指導

㋩ 肢体不自由児施設入所対象者の把握および諸手続

㋥ 身体障害児の補装具交附修理に関する指導

㋭ 身体障害者の手帳交附手続についての指導

○日時

二月十三日午前九時より午後三時まで。

○場所

大牟田市保健所会議室二階

指導方針の誤り指摘

国鉄大会　団交正常への改選

【KNA】国鉄労組第十七回臨時大会は全労働者注視のうちに一月二十七日から静岡市駿府会館でひらかれ、会期を延長して二月一日おわつた。出席代議員は約五百名傍聴者は連日千五百名から二千五百名がつめかけた。

討議の焦点は昨年十月二十八日国鉄中闘が〝雷まんじゆう〟といわれた公労委の〝藤林あつせん案〟を受諾したことの可否、ひいては低姿勢論といわれる指導方針にしぼられた。この藤林あつせん案は「被解雇役員を排除しない限り団体交渉には応じない」というもので、これを認めれば今後不当首切りはやり放題、組合の骨ぬきと〝権利闘争〟を放棄する結果になつてしまう。これについて中闘は大会で終始一貫「組織の分裂をさけるためにはやむをえなかつた」という答弁を行つた。三日目の組織小委員会で佐藤代議員（東京）は「あつせん案受諾は分裂阻止に消極的効果はあつたかもしれぬ。だが問題は分裂主義者と闘う正しい方針をもつことだ」本間中央委員（広島）は「闘えば分裂するというが、機労はあつせん案を拒否して堂々と闘つているが分裂しただろうか」と発言し、あつせん案受諾を「やむをえなかつた」と主張する人びとからも中闘の指導方針の誤りが強く指摘された。

詩

【二席】

ロープは永遠に

四山　武田守目吉

千三百尺の坑底と地上とを結ぶ
一本のワイヤロープはやぐらの
空気を一ぱいに
吸いこんでゆるやかにすべりだした
昇る者と降る者とをそれぞれに
乗せて
六〇人の重さは永遠につながる
重さ
だが新鮮な空気を真黒く吸いこんだ
逞しいロープはなんとかろい足
取りだろう
まかしておけ、それぞれの活動
の場所へ
みんなをおくるまでーそれが私
の責任だ
坑夫達の世界は変りつつあるよ
苦の一秒間だ
ひゆつひゆつ　風がなる　雨が
滝を落すような
何も見えない暗闇だ　だが心配
するな
乗っていれば安心だ　目的地に
着くまで
それは職制の圧力も息苦しい雑
音もない
解放された明るい世界がやつて
くるよ
そうだ　貴方達の自由な天地が
速力を早めてケージは遠地らに
坑底へ―地上へ―足が宙に浮い
たようだ
腰のベルトを締めよ　みんな一
つの籠の中で腕を組め―前進―
前進―前進―
暗から光へ―暗から光へ―
今ケージはすれちがいだ　ご苦
労さん―
ご安全に―ほんとうにご苦労さ
ん
顔は見えないが　誰でもいい
みんな働く仲間だ　肩をたたき
あえ
しや変の空気が暖く手を伝わる
ロープは速度をゆるめる　あわ
てるな
もう太陽は目の前だ　みんなの
世界だ
ケージは静かに停止して
三十のキャップの光がはきだされて
元執行委員も―職場分会長も―
一様に石炭で化粧した顔を　歯
だけ白くほころばして
あふれるばかりの明るさだ　ご
苦労さん―
さあー　ロープは少憩だ
空気を吸いこめ　油を差せ
深呼吸せよ　次の活動の準備姿
勢だ

選評

野間　宏

「ロープは永遠に」（二席）（武田守目吉）

前半が散文的であり、全体にもつとむだをなくして、整理した方がよい。坑底と地上とを結ぶロープが停止して少憩に入つた結末では地上にはき出された労働者の喜びと、次の活動を待つ準備のふんいきとで、労働者的な明るさがかなりあふれ出している。